

所報

No.150
令和8年10月15日

富山県総合教育センター

富山市高田 525

E-mail: sogokyoiku@ed.pref.toyama.jp (代表)

URL: https://www.center.tym.ed.jp



センター
ウェブサイト



センター
Instagram

主体的に学ぶ 笑顔広がる夏の研修

教育研修部

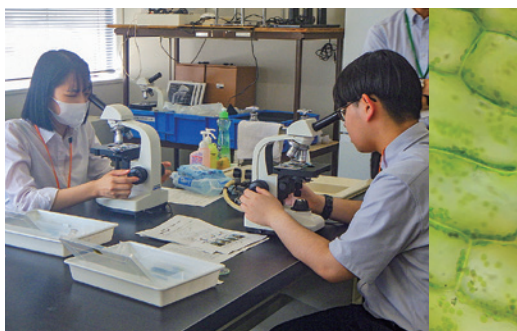


新規採用教員研修会（養護教諭）
「心肺蘇生法の理解と実習」



新規採用教員研修会（幼稚園教諭・保育教諭）
「幼児の造形遊び」

科学情報部



観察実験アシスタント実技研修会（生物分野）
光学顕微鏡を使ってオオカナダモの細胞を観察している様子



授業におけるICT活用研修会（生成AI未来創造コース）
「教育者の義務とは、子ども達の選択肢を広げること」

教育相談部



学校カウンセリング講座
（人間関係を育む学級集団づくりコース）



全校で取り組む特別支援教育研修会

センターNews

5年先、10年先の富山県の教育を創る！ ～「教育みらい検討委員会」始動～

変化の激しい現代、これからの富山の教育はどうあるべきか——。多様な視点から将来を見据えた教育課題に挑むため、校種を超えた所員が集う「教育みらい検討委員会」を発足しました。

当委員会では、現場の先生方や子どもたちを支えるため、「いじめ・不登校等」、「学習指導」、「教育制度・体制」、「多様な児童生徒への対応」の4つのテーマを中心に情報収集及び調査、研究を進めていきます。

未来の学校現場をよりよくするための研究成果に、ぜひご期待ください。

各部の研修より

教育研修部

集団をチームへと育成する人間関係づくりへの理解を深めよう

～初任者研修会・新規採用教員研修会「チーム育成力向上研修」～

◆講師 公益財団法人 富山県健康づくり財団 富山県国際健康プラザ
事業推進課 指導員（プロジェクトアドベンチャーファシリテーター）三浦 航兵

◆内容

本研修では、参加者が一緒に身体を動かし、意見交換をしながら課題解決をするレクリエーションを行うことを通して、集団をチームへと育成する人間関係づくりへの理解を深めました。

活動中は仲間の意見を否定せず、受容してから補い合うことで笑顔が溢れ、協力し合う姿が多く見られました。また、児童生徒がレクリエーションを行うときに感じる「恥ずかしさや不安」を追体験したことによって、教師として寄り添い、安心感を与えるための支援について学ぶ必要があることを実感した様子でした。

活動の終盤には、異校種の教員と一学期の振り返りや意見交換を行い、同じ初任者としての思いを共有したり、二学期に向けて意欲を高めたりする有意義な機会となりました。



全員で「あいこ」にしよう！



の
参
加
者
の
声

- グループでは、仲間が自分の意見をうなずきながら聞いてくれたことがうれしかったです。協力するためには、互いの考えを受け入れることが大切であり、今後は、同僚や子供と関わっていく中でもその姿勢を大切にしていきたいと感じました。
- 活動中に、自分自身も恥ずかしさやグループを作るか不安な気持ちを感じました。学校生活で同様の葛藤を抱える生徒の気持ちを忘れず、誰もが安心して一歩を踏み出せるような居場所を築いていきたいです。

児童生徒の心に寄り添うカウンセリングの推進

～初任者研修会・新規採用教員研修会「児童生徒の理解1」～

◆講師 教育相談部 客員研究主事 濱野 恵美

◆内容

初任者教員、新規採用教員を対象とした「児童生徒の理解1」の研修では、前半の講義「教育相談の在り方」で、児童生徒の悩みの多様化や変化に触れつつ、早期発見と組織的な対応の重要性について理解を深めました。続く「カウンセリング演習」では、受容と共感を意識した傾聴の基本技術をロールプレイ形式で実践し、教員自身の関わり方が児童生徒の自己開示に与える影響を実感する機会となりました。最後の情報交換では、各校での現状や日々感じている悩みを共有し合いました。



ロールプレイで模擬面談



参
加
者
の
声

- 話を聞くとときの視線や仕草等、様々な要因が話し手の話しやすさに影響することが分かりました。これから児童や保護者と1対1で話をする機会が増えるため、相槌や表情等を意識して相手が安心して話せる雰囲気づくりに努めていきたいと思いました。
- 質問ばかりの一方的な面談や相談とならないようにするため、生徒が普段から頑張っていることや興味・関心があることを把握し、生徒の相談内容に対して深掘りしながら、生徒の心に寄り添った教育相談を実践していきたいと感じました。

学校外の現場から、教育を見つめ直す

～中堅教諭等資質向上研修「社会体験研修」～

社会体験研修は、学校外の多様な職種や価値観に触れることで、対人関係能力の向上や視野の拡大を図ることを目的としています。今年度は34か所の企業や施設にご協力いただき、実際の業務や社員の方々との対話を通じた貴重な学びの機会となっています。

(期間 7月から11月)



浄水処理用薬品を計量している様子
(富山県和田川水道管理所にて)



参
加
者
の
声

- 新聞社の方々の情報発信への情熱や時代の変化に対応する姿勢に触れ、「できない」と決めつけず挑戦する大切さを学びました。最初から可能性を狭めずに「まずはやってみる」という行動力こそが、新しい価値を生み出すのだと実感しています。
- 研修を通じて、本の知識以上に語り手の実体験や背景から生じる言葉こそが深く心に残るのだと実感しました。また、子供の「こんな人になりたい」「やってみたい」という気持ちを育むことが教育の原点だと強く感じました。2日間、視野が広がる刺激的な時間を過ごし、この歳になってからでも「夢を追いたい」、「夢をもちたい」という気持ちになってしまう時間でした。

理科の魅力を再発見！

8月25日(火)・26日(水)の2日間、「観察実験アシスタント実技研修会」を開催しました。この研修会は、「令和8年度大学生派遣こどもエール事業」の一環として6月・8月の年2回実施しています。これから県内の小学校へアシスタントとして向かう大学生たちが、理科の授業をスムーズにサポートできるよう、必要な知識や技能を身に付けることを目的としています。実験の準備や事前の確認(予備実験)、理科室の整理、授業のお手伝いや教材づくりまで、現場で役立つノウハウをじっくり学びました。実技講習では、物理・化学・生物・地学の4分野を網羅！器具の正しい扱い方や基本操作に加え、特に大切な「安全管理」について体験しながら学びました。子どもたちが安心して実験を楽しめるよう、真剣な眼差しで取り組む姿がとても印象的でした。

参加した大学生からは、「久しぶりの理科実験でとっても楽しかった！学んだことを配属校で生かしていきたいです。」「安全管理について初めて知ることが多く、すごく勉強になりました。児童が安全に学べるようサポートしたいです。」等、頼もしく前向きな声を聞くことができました。

若い力が小学校の理科の授業を支え、子どもたちの「なぜ?」「すごい!」を引き出す大きな力になります。これからも子どもたちが理科の楽しさを実感できる環境づくりを進めていきますので、皆さんもぜひ温かく応援してください。



【化学分野】
ピペットの正しい使用方法について



【物理分野】
電気の利用について

学びを止めない夏！ 教員の専門性をアップデート

デジタル・シティズンシップ教育など 15 講座の研修を実施

情報教育室では、夏季に教職員研修15講座を実施しました。7月30日(木)には、国際大学グローバルコミュニケーションセンター主幹研究員の豊福晋平准教授を講師にお迎えし、デジタル・シティズンシップ教育研修会～子供自身がテクノロジーの善き使い手となるには～を実施しました。小学校9名、中学校8名、高等学校7名、特別支援学校5名の計29名が参加しました。

デジタルが日常化した現代における子供たちのメディア利用について、単なる禁止や制限(スクリーンタイムの制限など)ではなく、子供たちの葛藤に寄り添い、デジタル空間を「公共空間」として主体的に生きる力を育む(デジタル・シティズンシップ)ためのアプローチを、ワークショップや話し合いなどを通して学ぶという内容でした。

参加された方の感想の一部を紹介します。

- そもそも情報モラル教育とデジタル・シティズンシップ教育の区別がについていなかったもので、基本的な視点から教えていただき、大変勉強になりました。
- 情報モラルの考え方からデジタル・シティズンシップの考え方への転換は、目から鱗が落ちる感じがしました。
- 「責任のリング」の大切さがわかりました。デジタル・シティズンシップ教育の考え方をもっておくことで、子供への指導観が大きくアップデートされました。特に、公にすることは社会的な責任をおびる、ということの重要性がわかりました。
- 昨年の研修内容がさらにアップデートされており、とてもよい学びになりました。新しい試みとしてワークシートを作成する活動では、皆さんと協働しながらアイデアを形にできて、楽しく取り組むことができました。

今回のデジタル・シティズンシップ教育研修会は、子供のデジタルメディア利用や社会参加のあり方を深掘りする、とても実践的な機会となりました。今回の学びが、各学校での子供たちへの指導やICT活用のアップデートにつながることを期待しています。



デジタル・シティズンシップ教育研修会

子どもの状態を見立てる（＝心情の想像）ことから始めよう

～学校カウンセリング講座（心がつながる教育相談コース）全2日間～

このコースは、日常のコミュニケーションに生かすカウンセリングの知識や技法を学び、児童生徒や保護者などに寄り添った聴き方、話し方について考えることで、実践につなげる機会とする研修です。今回は1日目の内容をお伝えします。

◆講師 いとう発達・心理相談室 代表 伊藤 二三郎

◆演題 ポリヴェーガル理論でわかる「不登校」と「安心」の関係～今日からできる、子どもの安心づくり～

◆内容

午前の講義では、子どもの状態を「ポリヴェーガル理論」をもとに見立て、子どもにとっての安心づくりについて考えました。子どもの状態を3色「青：凍りつき・シャットダウンモード、赤：逃走・闘争モード、緑：社会的つながり・安心安全モード」で捉え、なぜそのような状態になっているのかを想像しました。子どもの状態を見立て、教師自身が安心安全なモードで子どもに接することが大切であることについて、講義や簡単なワークを通して考えました。

午後の演習では、教師自身のモードが子どもにどのように影響するか、実際の場面を想定し、校種混合のグループで考えました。



講義中のワーク
「明日も行きたくなる学校とは？」

参加者の声

●午前の講義では、子どもの安心感を広げていくこと、「不登校はNG（よくないこと」という考えを醸し出すこと）は一番NG」、子どもに社会的つながりをもたせることなどが印象的でした。午後の演習では、グループの先生方の実践や事例を聞きつつ、自分の普段の取組みを振り返ることができました。どちらも現場で汎用できる研修の内容でありがたかったです。

全ての児童生徒の「分かった!」「できた!」を引き出す授業を目指して

特別支援教育の視点を取り入れた授業づくり講座

～通常の学級における授業のユニバーサルデザイン～第2回

この講座は、インクルーシブ教育やユニバーサルデザインの視点を取り入れた、誰もが「分かった!」「できた!」を実感できる授業づくりを学ぶ研修です。

◆講師 東部教育事務所 小中学校巡回指導員 浜松 英久

◆演題 講義：「子供真ん中」の授業づくり

演習・情報交換：「インクルーシブ教育の視点から振り返る日々の実践」

◆内容

講義では、授業のUD（ユニバーサルデザイン）について、授業の工夫、個への配慮、個に特化した指導の三段構えでつくる授業デザイン、授業のUDの視点と手立てについて具体的に学びました。

演習・情報交換では、2学期に向けて、それぞれが考えた気になる子の「分かった!」「できた!」を引き出す、単元（授業）の組立てを、同じ学年や教科の先生方3、4人で共有しました。



それぞれが考えた授業について
情報交換する様子

参加者の声

- 講師の先生の講話が、日頃の自身の指導を振り返る契機となりました。子供の興味関心を大切にしたい授業をしたいと思います。
- 「苦戦している子」に焦点を当てることが、結果的にクラス全員の分かりやすさにつながると実感できました。
- 同じ学年をもつ先生方と特別支援教育の視点で授業や単元を考える時間がとても有意義な時間になりました。

発達特性に応じた学習支援や配慮の工夫を

特別支援教育講座（学習支援コース）

このコースは、特別な支援を必要とする児童生徒の読み書きや計算等の学習支援について理解を深め、一人一人の障害特性に応じた指導や支援等を具体的に学ぶ研修です。

◆講師 信州大学 教授 高橋 知音

◆演題 学びにくさの背景にある発達特性の理解と学習支援や配慮の工夫

◆内容

講義では、子供の学びにくさの背景にある発達特性の理解や支援の方法、合理的配慮などについて学びました。指導の参考になる書籍やアセスメントツール、文房具などを多く紹介していただき、明日からの実践に活かせる内容でした。

グループワークでは、各自がこれまでの実践を振り返り、効果的な支援や有効な配慮などについて話し合いました。



学習支援について意見交換する様子

参加者の声

- 色々な学習支援について学ぶ中で、うまくいかない時にどうアプローチすべきか、よい発想の転換ができました。
- 読み書きの学習で、読み書きの構成要素に基づいて、どこに学びにくさがあるのかアセスメントができそうと思いました。
- 合理的配慮について、大学入試、高校入試での実例、それには実績が必要であるという話は、将来を見据えた進路指導に大いに役立ちました。

教育と発達の関係をどのように捉えるべきかという問題は、子どもに「いつ」「なにを」「どのように」教育していくかという学校の教育活動全体を決定するだけでなく、子どもにどのような能力を育成すべきかという能力論をも規定する重要な意味をもっています。

教育と発達の関係については、「教育は発達に従うべき（発達に応じた教育）」という立場と「教育が発達を先導すべき」という立場があります。

前者には、過度の詰め込みを防止し、教育の適時性を担保するという意図があり、学習指導要領がそれにあたります。特に平成10年までの学習指導要領では、「発達段階」という言葉が随所にみられ、総則において「児童（生徒）の心身の発達段階や特性を十分に考慮して」教育課程を編成すべきことや、「内容の取扱い」などに「学年の発達段階に応じた」や「発達段階に即した」といった語句が示されています。

「発達段階」といえば、ピアジェやエリクソンなどの理論が想起されますが、学習指導要領解説には学術的な根拠や基準が示されていません。そのため、学校において「発達段階」について検討する場合は、教師間の主観のすり合わせ（間主観化）によって進めていくことになります。その際、様々な視点から意見を出し合うことが大切であり、その過程が「発達段階」の根拠として重要な意味をもちます。

この立場には、はじめに発達があり、その次に教

育があるということになり、子どもが一定の成熟水準に到達するまで、一定の教材の提示をしないという「待ちのレディネス」になりかねないという指摘があります。

これに対して、教育は発達に先行し、発達を引き出す源泉である、教育が発達を先導すべきという捉え方もあります。これについて、ヴィゴツキーは、「人間の高次な精神機能は子どもの内面から自生的に形成されるものではなく、社会的な起源による、つまり、子どもの精神機能はまず大人（親や教師）との交わりによって内面化し、能力になっていく」としています。また、ブルーナーは、「どの教科でも、知的性格をそのままもって、発達のどの段階の子どもにも効果的に教えることができる」というレディネス観を示しています。

平成20年以降の学習指導要領では、いわゆる「歯止め規定（性教育に関するものを除く）」が見直され、児童生徒の実態に応じて「発展的な学習」を取り扱うことが明確に位置付けられました。また、子どもの発達についても、「発達段階」という画一的な区分としてではなく、「発達の段階」として、個々の成長や学習状況に応じて柔軟に捉えることが重視されています。

個別最適な学びの実現にあたっては、「発達段階」を実体のあるものとしてあまり固定的に捉えず、一人一人の状況を丁寧に見取り、発展的な学習と補充的な学習を適切に組み合わせることが求められています。

トビタテ！ 留学JAPAN 通信

富山県の1期生49人が、17カ国へ派遣！

企画調整部企画課 研究主事 山本 清則

「トビタテ！留学JAPAN」は、産学官協働で高校生の海外留学を支援する文部科学省と日本学生支援機構の共催事業です。令和8年度からの3年間、富山県は拠点地域に指定されました。「未来を拓くとやま高校生グローバル人材育成事業」として、1期生には49人が採用されました。7～10月の期間中に、希望した国へ、希望した日数だけ派遣され、各々が考えた探究活動を現地で実施してきます。1期生の派遣国は、合計17カ国となりました。

留学出発前の6月に、地域壮行会と事前オリエンテーションが高志会館で開催されました。事前オリエンテーションで実施した5つの研修を紹介します。



①Plan Share & Care

協議会・支援企業から助言者12人によるファシリテートのもと、一人一人の留学計画のブラッシュアップを目指し、意見交換しました。



②Chat & Chew

ALT10人と一緒に昼食をとりながら、ALTの母国の話や、日本との生活習慣の違いについて話し合いました。



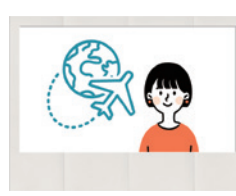
③Ambassador Academy

富山や日本の文化を派遣先で紹介する「観光大使」活動について、ALTと検討しました。



④安全管理について

富山県立大学の清水准教授より旅のトラブルと安全対策についての講義を受けました。



⑤先輩トビタテ生からの
激励メッセージ

2015年度トビタテ！留学JAPANに参加された川原さんより助言をいただきました。



研修風景はこちらから

今後は、11月に事後オリエンテーションを受け、12月の成果報告会にて、派遣国での探究活動の成果を発表する予定となっています。1期生49人は、留学のよさを体感したトップバッターとして、富山の留学気風を盛り上げていきますので、ご注目ください。

随想

ナスとピーマンと義母と

教育研修部長 大野木 直美

6月、職場でナスとピーマンの苗をもらった。自宅には畑はおろか庭さえないので、大きめの鉢をふたつと土を買い込み、ベランダで育て始めた。

すぐに困ったことが生じた。県外出張やら旅行やらで水やりできない日が続くのだ。そこで、同居の義母に、留守中の水やりを頼んだ。義母は病氣療養中であったが、快く引き受けてくれた。農家で育った義母にとって、鉢植えのナス1本、ピーマン1本はままごとみたいなもので煩わしかっただろうが、帰宅後も水やりを放棄したままのずばらな嫁に代わり、朝晩欠かさず水をやり、支柱を立て、肥料をやり、世話をしてくれた。

本格的な夏を迎えたころ、義母の病氣が悪化し、入院することになった。水やりの主が代わっても、ナスとピーマンはけなげに育ち、やがて花を咲かせた。ピーマンはかわいい実が付き始めたが、ナスは花ばかり咲き、花が落ちて実がつかない。

不思議がっているうちに、入院から三週間で、義母はあっけなく旅立ってしまった。

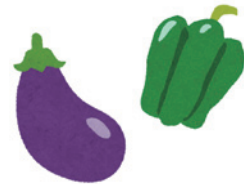
葬儀の後、我が家を訪れていた義母の姉が、花ばかりのナスを見て、せっかく大きく茂っていた葉をぱちぱちと切り落とした。すると翌日からナ

スはぐんぐん実を膨らませ始めた。摘葉、という作業だったことは後から知った。それから数日、立派に育ったナスとピーマンを収穫した。正直、コストを考えるとスーパーで買った方が安い。しかし、とれたての、大切なナス2個とピーマン3個を義母の遺影に供える。あれー、なったけー、といういつもの声が聞こえそうだ。

義母はこの世を去り、残されたナスとピーマンは青々と元気に実を結ぶ。私はそれをおいしく食し、仕事に向かう。命のやるせなさ、受け継がれていく命の営みを思う。

世の中には、科学技術や数式だけでは解決できない、人間ならではの領域が存在する。たかがナス、たかがピーマンに過剰な意味づけをしてしみりするのもそのひとつ。ときに面倒で、合理の目を惑わせることすらある感情や感性。でもそれが人間のさまざまな営みを支えていることも確かだ。

そうそう、だからやっぱりSTE「A」Mなんだよねと納得しながら、今日も水やりをする。



科学の散歩道

富山の大自然と森の中で

科学情報部 研究主事 堺 康浩

紅葉の名所は国内に数多くあるが、「一番の場所は？」と聞かれれば、私は迷わず「秋の立山」と言いたい。「20年に一度の美しさ」とニュースで話題になった2012年、天気の良い休日に子供と二人で出かけた。朝7時に立山駅に着いたころには、ケーブルカーを待つ列が立山カルデラ砂防博物館の前まで伸びていた。2時間以上待って乗車し、高原バスの車窓から見えた弥陀ヶ原から天狗平にかけての景観は忘れられない。赤（ナナカマド等）、黄（ダケカンパ等）、緑（オオシラビソ等）が織りなす圧倒的な鮮やかさだった。

数年前の10月、一念発起して薬師岳に登ることにした。標高1300メートルからのスタートで、山頂2900メートルまでの標高差は、室堂から雄山を目指すルートの実に約4倍だ。前半の樹林帯は登山者泣かせの急登だが、オオシラビソやダケカンパの木々を仰ぐと、あの立山の紅葉が鮮明に蘇る。11時間歩き続け、最後はヘッドランプの明かりだけを頼りに下った。暗闇から動物が飛び出さないかビクビクしながら、ようやくブナ林の駐車場にたどり着いた。

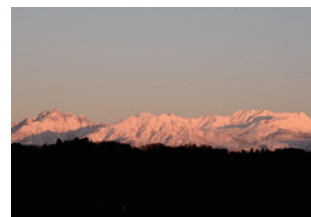
ブナは、私にとって特にお気に入りの木である。

冬のスキー場、真っ白なゲレンデの脇にも多く立ち並び、くねくねと伸びた枝先と白い樹皮が美しい。足元には動物の足跡もよく見られる。スギやカラマツと違って幹が曲がり、建築用材には向かないが、脂肪をたっぷり蓄えたその実はツキノワグマの大好物だ。今年は比較的に多くつけているようなので、秋のツキノワグマによる人里での被害が少ないことを願いたい。

高度計もスマートウォッチも持たずに山に入るが、季節ごとに表情を変える自然の樹木こそが、私にとって一番の道しるべである。



2012年の雄山の紅葉



夕焼けに染まる立山連峰